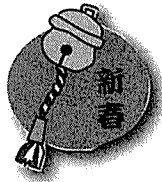


閉塞感漂う現在社会の大学に思うこと



松本 紘

少子高齢化、情報化、グローバル化などの進展により社会の変化は留まることなく、そのスピードを更に加速させている。経済面では、リーマンショックにはじまり、昨今の欧州債務危機や過去最高の円高の影響を受け、長らく続く景気低迷の出口は未だ見えない状態である。自然現象を見ても、地球温暖化を原因とすると思われる世界的な天候不順が目立ち、我が国でも台風や豪雨による水害に見舞われた。特に、今年3月に発生した東日本大震災とそれに起因する福島第一原子力発電所の事故は、その被害や各方面に与えた影響の大きさにより、日本社会に衝撃を与え暗い影を落としている。このような状況の下、我が国は、国民に希望を与える将来ビジョンを見出ししているとは言えず、世界的な激動の時代にあって国際的地位にも陰りが見え、社会的に閉塞感が漂っている。

大学を取り巻く環境を見ても、国からの基盤的経費が削減され大学財政が年々厳しくなる中で、18歳人口の減少も加わり、経営基盤が不安定となっている。各大学では機能強化や特色作り、外部資金の獲得に懸命になっているが、なかなか明るい兆しは見えてこない。大学も閉塞感にとらわれ、生き残りのため活路を見い出すことが迫られているとも言える。

しかし、大学は生き残りのための経営のみに汲々とするのではなく、このような時だからこそ、知の創造拠点である大学自らの使命を直視すべきである。我が国には、平安時代に京都に大学寮という教育機関が存在しており、江戸時代には各地に寺子屋が建てられるとともに、多くの藩校が設けられていた。我が国は古くから人材の育成、すなわち「育人」に力を入れ、優れた素質を持つ人物に高い教育を受けさせることで有為な人材を輩出してきた歴史がある。例えば、幕末は現代とは比べものにならないくらい社会が切迫した状況であった

が、そのような困難な状況でも明治維新が成功し、近代化の基礎を確立できたのは、「育人」によって輩出された多数の優れた人物が活躍したからである。

現代においても、大学は、この「育人」の機能を発揮して、戦略的な将来ビジョンを見出し新しい日本を切り拓く、優れた人材を輩出することが求められている。このためには、知の創造活動たる研究活動や社会貢献活動など、大学の活動を活性化しなければならない。大学ごとに置かれた状況は異なるだろうが、教育研究方針の明確化、質保証、国際化への対応、ガバナンスの強化、教職員の意識改革、学生支援などやるべきことは山のようにある。

「育人」の機能強化の観点からは、アドミッションポリシー・ディプロマポリシー・カリキュラムポリシーの調和がとれた教養教育・専門教育の在り方の模索が重要課題の一つとなろう。特に、ディプロマポリシーについては、学生の質保証を確実にする上で出口管理を重視した対応が必要であり、入学定員管理の在り方など諸制度の改革も視野に入れる必要がある。

また、大学の活性化のためには、学外の公的機関、企業、NPOなどとパートナーシップを確立することが欠かせない。様々な要因が複雑に絡み合う現代社会においては、大学の知を結集したとしても大学のみですべてを解決できるわけではない。社会の様々な主体とパートナーシップを組むことで、さらに大きな力を発揮することが可能となる。

「育人」により新しい日本を切り拓く上で、大学の活性化は必要不可欠である。一方で、大学が経営上厳しい状況にあることも事実であり、国からの財政面、制度面からの支援が望まれる。しかし国からの支援にばかり頼ってもいられない。活性化への取組をしていく中で、大学としても非常に厳しい対応が迫られることが多くなろう。しかし、大学としては、それを乗り越えて、これをやらねば日本の将来はないという覚悟を持って取り組まなければならないと感じている。

本号では、国公立大学の学長をはじめ大学に深い造詣をお持ちの方々が、それぞれの立場から執筆いただいている。読者の皆様には御一読の上、国家として大学の活性化をどうすべきかを考えていただき、共にマイナスをプラスにできるよう取り組んでいただけると幸いです。

(京都大学 総長/宇宙電波工学)